

三月のテーマ

お金と倫理



え・城谷俊也

金銭が自ずと集まる会社とは？

金 金の倫理をテーマにした講座の終了後、ある夫婦が、講師を駅まで送迎しました。以下はその時の会話です。

妻「お札（紙幣）にアイロンをかける、なぜか家計費の支出が少なくて済むのですよ」

講師「それは不思議ですね」

夫「本当にそうなのです。以前は家内に言われるまま、毎月三十万円ずつ渡していました。足りない時は、そのつど必要額を渡していたんです」

妻「『今月は少し足りなくて…』と追加をお願いすると、決まって夫婦喧嘩になるのですが、お札にアイロンをかけ始めてから、一度も夫婦喧嘩がないんです。追加の要求をしないから（笑）」

夫「追加要求どころか、妻のほうから『家計費は月二十万で大丈夫』と言うのですから、喧嘩になるはずがないですよ」

講師「なぜ月に十万円もの削減ができたのでしょうか」

妻「うーん、なぜでしょう」

夫「同居する家族の人数が変わ

ったわけでもないし、保険の契約を変えるなど、特別な手立てをした覚えもないしなあ」

妻「強いていえば、お札にアイロンをかけるようになってから、支払いをする際に（これは〇〇のお金、これは〇〇に要する費用）というように、お金の使い道に気を配るようになりました」

講師「なるほど。それで結果として、使途不明の無駄遣いがなくなって、不要な物を買わなくなったのかもしれないね」

妻「それに、ひと手間かけてシワを伸ばしたお札でしょう。支払いをする時も、自然に（行ってらっしゃい、またお友達を連れて帰ってきてね）と、心の中で唱えて送り出すようになりましたね」

夫「たしかにそうかもしれません。…それにしても、これまでの十万円はどこに消えていたんだ」

妻「そう言いながらも、ご主人は目を細めていました。」

*

紙幣にアイロンをかけ、しわを伸ばして扱うことは、金銭を大切に

にするほんの一面の実践です。肝心なのは、その行為の奥にあること、すなわち「何のために支払うのか」と、金銭の使途を考えるとどこにあるのでしょうか。

これを企業経営に応用した場合、「何のために」利益を上げるのか、その利益を「何に使うのか」と問い続けるうちに、経営のより高い精神的意義が明確になってきます。単に欲望から金銭を残そうとするのではなく、利潤を得て、永続的に社会に貢献できる会社を目指すなら、そのために会社を大きくしようとすることは「活きた金銭の使い道」に他なりません。

金銭は、自らを活かして使ってくれる人や会社のもとに集まるといふ習性を持っています。また、よい会社には、金銭だけでなく、人も物も情報も同じように集まってきます。

金銭の習性をよく理解し、金銭が友達を連れて集まってくるような会社、「儲ける」のではなく、自ずと「儲かる」ような会社を目指したいものです。